

いる。

また日本で彼の理論を受けとめる場合の視点として以下の点を見ておくことが必要である。

①シーデントップはアメリカにおいてどのような学派の人か。

②アメリカのどの地域で支配的な主張となっているのか。

③社会学者と教育学者では「プレイ論」理解が異っているのではないか。

④シーデントップが認識したアメリカ社会と日本の社会とは「プレイ論」の受容において何が、どう違うのか。

⑤シーデントップの「through-Education」の理解とわが国のそれとは必ずしも同じ概念ではないのではないか。

以上、報告と討論を一緒にまとめた。

(文責・早川武彦)

## 2. 社会とスポーツ・スポーツ運動(第2グループ)

### (1) フランス社会とスポーツ運動の構造と特質 — 1920~30年代を中心に —

'83.9.27 伊藤 高弘

#### I 研究の経過と水準

1981年9月12日、早川武彦「フランスの体育・スポーツ状況—その把握のために」、伊藤高弘「フランスの国民スポーツ運動『研究』の概観」(詳細は『研究年報 '82』5-6ページ 参照)の二報告が行われた。この報告にもとづく討論のなかで、「スポーツ状況と国民の参加」(川口)、「社会体育行政の現状」(関)、「社会学のスポーツ政策への影響」(高津)、「都市と農村のちがひ」(唐木)の質問や、こんごの研究の視点・方法に関する発言がだされた。伊藤は、「農村分析」などの必要性、重要性を認めるとともに、フランス社会の「全社会史的考察」(『研究年報 '83』)へ進むことをこんごの課題とした。

#### II 本報告の位置と要旨

本報告は、フランスの全社会史的考察に入る前の準備作業として私の三つの報告(①「スポーツと社会分析視角①-⑤」「スポーツの時間と物理的・社会的時間の一致・統一」『研究年報 '83』、②「スポーツと社会—スポーツのルールと時・空間の関連」『たのしい体育・スポーツ 1983. Vol 5』、③「スポーツの時・空間(論)研究の意義」『運動文化研究 1983. 創刊号』)をふまえたものである。

報告は、1. 現代フランスとスポーツをめぐる状況と課題 ①経済の計画化と大企業の国有化、②中央集権的な政治・経済・文化の構造と地方分権、③年金、余暇、雇用の関連と構造、④教育、文化、スポーツ理念の転換と法・制度の改正と厳格な実施、⑤複数のスポーツ組織の認知と共同。

2. 現代フランス研究にとって、なぜ1920~30年代の研究が必要なのか ①変革の契機の発見、創造と主体形成、②先進国の直面する課題の同時性、異同性、③古い社会の母斑と新社会建設の結節・転換期。

3. 両大戦間期の検討 ①政治上、軍事上の勝利と混迷—戦後復興、②経済の発展と社会構造の変化、③政党、労働運動分野の分裂・抗争、④計画化の時代と人民戦線前夜、⑤人民戦線・政府の実現と対独戦期。以上のレジュメで行った。

#### III 報告内容の詳細

1の⑤の内容は、普及と向上の関係、オリンピック運動に関して、具体的には、(1)補助金、(2)自主管理、分権、参加、(3)拡大(諸階層と移民など)、(4)教育・学習、(5)指導者養成、(6)国際交流が挙げられる。

2の③では、思想・政策的にみれば(たとえば余暇政策、科学研究)、この両大戦間期から現代までを次の三期に区分でき、その系譜を追求することが可能である。(河野健二編『ヨーロッパ1930年代』岩波書店、1980、「参考文献」、坂上(経済学)/谷川(思想)/富永(社会学)/服部(歴史

学), 参照) 第一期: 1936. 6 人民戦線政府の時期。(竹内良知編『ドキュメント現代史6人民戦線』平凡社, 1973, 「文献案内」, 横田地弘「反ファシズム運動」『世界歴史・現代5』岩波書店, 1971, 参照) 第二期: 1944~47, 戦後の革新政府から冷戦構造までの時期。第三期: 1973 (社共などの「共同政府綱領」) をへて1981. 6. のミッテラン政権の誕生へいたる時期。

3の①では, 次のA・Bが歴史的ポイントである。A. 第三共和制誕生, 賠償支払い, アルザス・ロレーヌのとりもどし(1871)。B. 国民連合(右翼)勝利(1919), 「左翼カルテル」勝利(1924), ボワンカレ(右翼)勝利(1928)。

②の内容は次のとおり。(1)1922-29, GNP 5.8%の高率達成し世界的水準に(鉄鋼・化学・電気・機械)。自動車, アルミなど先行。(2)農業国から工業国への転換と国有化をめざす統合。1921年の全人口にたいする農業人口は54%。イギリス20, アメリカ49。日本における労農の比率の転換(労働者多数)は1937年以降。(3)恐慌が中部・東北山岳・南部の農業・農民を直撃, 不況。(4)鉄道(1921, 政策統一, 1937, 国有化), 航空(1933, 国有化)。

③の内容。(1)ロシア革命(1917)の成功と影響。(2)ドイツに対するイギリス・アメリカのテコ入れ。(3)サンディカリズムへの訣別と社会党の分裂。社会党の多数派, 共産党創立(1921.12)。CGT分裂し, コミンテルン派CGTU(統一労働総同盟)結成。(1922.6), CFTC(キリスト教労働同盟)と三派鼎立の時代。のちに, FO(技術者の力)が加わる。(4)「新しい教育の協同組合」(CEL)1927創設, セレストアン・フレネ。(W. Z. フォスター, 塩田訳『世界労働組合運動史』上, 大月書店, 1957, 169-174頁, 参照)

④の内容。(1)国家の経済活動の直接・間接の介入の促進。(2)フランス経済の近代化計画(農村の電化, 水道の敷設, 農業保険, 農業研究所), コミュニケーション(国道, 港湾, ラジオと自動電話), 教育と保健衛生, 有給休暇。1929~30, 首相アンドレ・タルディユ, 中央集権と分権。(3)国

家と知識人(テクノクラート)の問題。高等師範学校, 理工学校-国立大学にかわる国立行政学院の創設, 「ポリテクニク経済研究センター」。(4)大衆文化の時代(映画など)と非フランス文化との交流(フランス文明・文化の特性)。

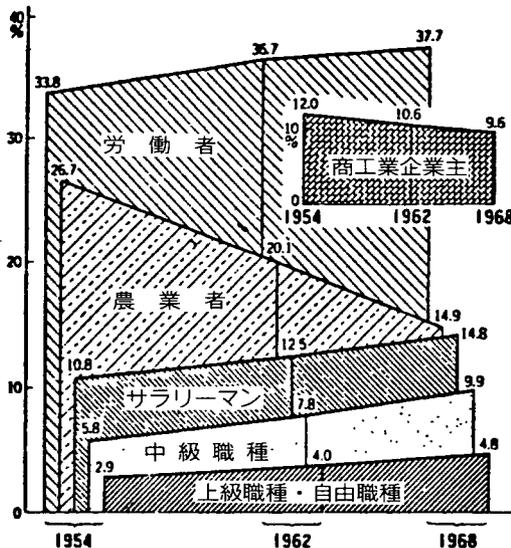
⑤の内容。(1)恐慌が工業に影響を与えはじめ不況。(2)社共統一行動協定(1937.7.27), イタリアへ影響が。(3)人民連合(戦線)綱領(10団体起草, 1936.5.16)。政治的要求I.自由の擁護, 6.学校教育と信教の自由, 経済的要求I.時短, 退職金, 労働組合の承認, 余暇立法, 工場代表制度(戦後の企業委員会法に)。(4)FSGTの統一(1934-81)。(5)INSEP(国立体育・スポーツ研究所)の基礎。(6)唯研, 労働者大学, 文化の家の活動。ロマン・ロラン, アンリ・バルビュス, ランジュヴァン(物理学), ポリツェル(哲学), アンリ・ワロン, ジョルジュ・フリードマン(労働社会学, デュマズディエの師)。

#### IV 明らかになったこと

(この項は, 別稿「海外研修報告」の記述と重複するかもしれないが, 容赦願いたい。)

本報告で明らかとなったことは, ①フランスの労働者スポーツ運動をめぐる状況と課題それ自身が歴史的性格を刻印されていることである。たとえばフランスの市町村の分割単位と権限は, フランス大革命時の蜂起の単位が今日まで温存されたもの(本田喜代治『フランス革命史』, 法政大学出版局, 1973)であり, 900万のバリと数百・数千の人口の自治体とが基本的には同等の権限を有するという矛盾した状態がある。②またフランス大革命前の中央集権制が, そのごの発展を準備したが, 現代における地方分権の実現のための桎梏となっていることや, 古い教育制度(含大学)の打破と改正がはじまってわずか10年ほどであること, この教育改革は, 多民族複合国家における国民や移民の教育(生産力)にとっても喫緊の国家的事業であり, 理念・法改正が準備されていること, などである。(なお, 1984年4月12日, 国民議会(下院)は社共両党の賛成によって「新スポ

就業人口の社会的構成の変化 P. 284



※ 上級職種には、教授のほか、技師・高級官僚が含まれ、中級職には、専門技術者・医師・教職・研究職が含まれる。労働者層の内部では、技術的熟練労働者が増大、単純労働者が減少している。

農業経営規模の比率 P. 285

	1892	1929	1942	1955	1967
1ha以下	39.2	25.6	9.4	6.6	5.0
1-5	32.0	28.8	26.1	28.4	21.5
5-10	13.9	18.1	21.2	20.8	17.7
10-20	7.6	14.9	22.8	23.5	25.2
20-50	5.9	9.6	16.1	16.5	23.6
50以上	1.4	3.0	4.4	4.2	7.0

ーツ法案」を採択(詳細は『赤旗』('84. 4. 15)「加藤長特派員報告」参照)。

③つぎに、国有化された企業(ルノー、エールフランスなど)の労働者スポーツは、F S G T (

フランス労働者体育・スポーツ連盟)の中軸であるが、その開始は1920年代にさかのぼることができ、1930年代の工場代表制度が戦後(1947~)の企業委員会(法)へと発展させられたこと、④また、フランスが基本性格として農業国であり、前述の企業の国有化とともに、地理的条件と耕作地の拡大によってEC随一の生産量を誇る。この農業・農民の自立こそ農民的(リユラール)デモクラシーを生みだした。(ちなみに、フランスにおける1ha以下は5%の少数であるが、日本では中・大農の規模に相当する。左表で明らかのように、10-50haが約50%を占め、フランスの中農における耕作規模の大きさが知れよう。その結果、都市の資本と人口の集中と文化の大衆化、商業化とは区別された保守的ともいえる独自の世界が温存されている。この歴史的土壌にいかんして、スポーツを根づかせるか、ということも現代の課題の一つである。

⑤さいごに、移民のことについて簡単にふれておきたい。フランスにおける異邦人としてとらえるならば、移民は性格が異なるが、難民、ジプシーやユダヤ系などとならんで共通の問題をかかえている。移民は、第二次世界大戦では、移入人口数の比は変化したが(詳細は林瑞枝『フランスの異邦人』中公新書、1984、31ページ参照)大都市・工業都市では労働者の中の比が高い。ほとんどが単純工であり、都市では、道路、下水道などの清掃を受持っている。したがって、教育水準の低さは、雇用と関係して生活水準を規定し、子弟の教育、非行対策、地域における諸活動のなかでスポーツは重視されはじめている。しかし100人の移民が集まれば25カ国の言語がとびかうことでも明らかのように難事業である。ちなみに、移民とともに亡命者など自由の迫害を受けて母国を追われた人々を迎え入れる考え方や根拠はフランス共和国憲法(18世紀)にある。

V こんどの課題

「新スポーツ法案」の検討で明らかになったことは、フランス研究でありながら、アルザス・ロ

レーヌをとりあげる場合には、独法との関連が、また1930年代のバリとフランスは、同時代のスペイン・バルセロナとの関係を重視しなければならず、ヨーロッパ観の再検討が求められている。

なお本報告（要旨）では、フランク王国以降のフランスの形成についてふれなかったが、この点に関して、マルク・ブロック、河野・飯沼訳『フランス農村史の基本性格』創文社、1980、増田四郎『ヨーロッパとは何か』（岩波新書、1984第24刷）を紹介しておきたい。とくに、地中海世界、セヌ河以北、東ヨーロッパの三帯把握については、参考となりえよう。

## (2) 1920年代のスポーツイデオロギー —「スポーツと文学」研究と現代日本の 1920年代論—

'84. 1. 24 上野 卓郎

### I W. ロートの「スポーツ宗教」論

<文化としてのスポーツ>論構築と<スポーツ現代史>認識のためには、1920年代論およびスポーツと文学、その他の文化ジャンルのイデオロギー的関係の究明を本格的に研究の視野に収める必要がある。その契機となったのは、Wロート「20年代のスポーツと文学」(Stadion, 1981. Heft 1)であった。本報告以前にロート論文訳を配布し、報告では改めてその詳細報告はしないこととした。

ロート論文の要旨は次のとおり。—スポーツは1918年以後、ワイマールとウィーンの共和制の決定的な生活エレメント、その大衆化の重要なファクターであった。全き「スポーツ宗教」がスポーツにはほとんど形而上学的な地位を与えた。すなわち、20年代の価値真空(Wert-Vakuum)の中で、スポーツは一副宗教的なものと紙一重の代理機能をもったのであった。過ぎし時代の民族主義ないし理想主義の残滓がスポーツに護渡された。新古典主義的スポーツ哲学がスポーツの中に一切の高級文化(höheren Kultur)の予定条件を見たのである、いわゆる文化使命、物質主義と社会ダーウィニズム—それらは精神理想主義と混在し

て矛盾にみちたアマルガムを生む—に対して、いわゆる高級文学(Hoch Literatur)の作家たちは顕著に控え目な態度をとった。彼らがスポーツを文学化するのは極めて稀で、批判的エッセイストとしては、スポーツの精神的魂的な要求を拒絶した。しかし、通俗文学のジャンルでは、スポーツは賛美されたのである。偉大なスポーツマンの神格化は、ただ「共和主義者なき共和制」における「偉大な男」への普遍的熱望の特殊な例をなすものなのである。知的な「ひねくれ者」(Spielverderber)〔プレヒト、ムシル、ヨーゼフ・ロート、バウル・コーンフェルトなどの批評が挙げられる〕は、かのスポーツ狂信主義の疑わしさ、つまりその英雄崇拜とエリート主義に潜む反民主性、を十分予感していたことを証明した。1933年、スポーツとその公的イデオロギーがわけなくナチス国家とその生物学主義的世界観に統合されえたとき、上述のことは明らかになる。〔なお、通俗文学のジャンルでは、エドシュミットの“Sportum Gagaly”(1928)が代表的だとされるが、詳細な論及がされるのはテオドール・ハインリヒ・マイヤー『速度』である。〕

### II 20年代イデオロギーとしての「新即物主義」

ロート論文では、通俗文学の世界は、「新即物主義」とカテゴライズされている。しかし、これは広く20年代の思想として位置づけられるものである。この点について同時代の思想家エルンスト・ブロックの『この時代の遺産』池田浩士訳注の説明が一定の概観を与えている。

表現主義が20年代の「相対的安定期」〔資本主義の〕にはいて存在基盤をもたなくなったのち、ドイツには「新即物主義」と呼ばれる文芸思潮が生れた。「黄金の20年代」を背景にした消費文明、都市化のさらなる進展、機械技術の発達などから直接の影響をうけ、自我の主張や感情の表現を抑制して、「事実」そのものに即した創作態度をとろうとしたが、時代の底にひそむ虚脱感と閉塞感を反映して、多くは現実追隨的な美的感覚と現実変革の姿勢をもたぬシニカルな批判しか生み出し

えず、ナチの「血と土」イデオロギーをはじめとする非合理主義的傾向の抬頭にたいしてなら有効な対立項とはなりえなかった。ブロッホは、この思潮を「20年代」の重要なモメントとして把握し、独自の位置づけを与えている。

これをそのまま20年代スポーツ・イデオロギーとしていいか。文芸思潮において新即物主義に対抗する派は何であったのかといった基礎的知識に欠けているため、見取図を描くのは今後の作業として残される。

なお、報告資料として次のものを配布した。(1) 20年代プレヒトのスポーツ論：『プレヒトの政治・社会論』（河出書房新社、1972）から「スポーツの危機」「スポーツの宿敵」、(2) ローベルト・ムシル『特性のない男』（集英社世界文学全集）の抜書ノート：スポーツ論、時代認識、風俗論、「カカニア」＝ハプスブルク帝国論。(1)についてはロート論文にあったベルリンの月刊誌『横断面』のスポーツ特集とそれへのプレヒトの反撥を文献的に確認するとどめ、プレヒトのスポーツ論の展開については、彼のシナリオ・演出になる唯一の映画『クーレ・ヴァンペ』とともに、今後の労働者スポーツ運動史研究の一環をなすものとした。「えがかれたのは、＜泥沼＞におちた特定の労働者層の、疲れた、不活発なくらしである。…えがかれたのは、ある若い失業者の運命である。…えがかれたのは、大きな共産主義労働者スポーツ団体の活動である。この団体はドイツの労働者約20万人を包括して、労働者のスポーツを階級闘争に役だている」（『プレヒトの映画・映画論』110－111頁）。(2)については、次章のベルネット論文の参照で一定の像が浮かび上がるであろう。

### III R.ムシルのスポーツ解釈に関するベルネットの論文：K.Dinklage (hrsg.), Robert Musil. *Leben, Werk, Wirkung*. Rowohlt Verlag 1960. S.145f.

アムビヴァレントとしてのムシル文学の特徴がそのままそのスポーツ論にも貫徹する。そして、

20年代とスポーツ自体がアムビヴァレントではなかったか。カテゴリーも両面を表示し、難解となる。ベルネットの章だてにそって内容を示す。

(1) 同時代の普遍的アムビヴァレント：20世紀の開始とともに「健康と太陽が崇拜される一方では、胸を病んだ少女のやさしさが賛美された」、「信仰があると同時に懐疑的であり…頑健であるかと思えば、またひ弱であった」（『特性のない男』から）

(2) 個人的運命としてのアムビヴァレント

(3) 仮説の生命形式（エッセイ主義者としての自己規定）

(4) アスリートとしての「特性のない男」：実存的深さと精神的広がりをもたない（ムシルの）主題からすれば、スポーツのモチーフが小説から引き離されるのは許しがたい抽象だと思われるかもしれない。しかし、ムシルはスポーツを偶然とり入れたのでなかった。小説の意味構造上重大な機能をスポーツにわり当てたのである。ムシル自身、身も心も捧げてのスポーツマンだったが、同時にアイロニカルに距離をおくことができた。彼は若い時からテニス、フェンシング、ボクシング、トゥルネン、漕艇、帆走に親しんでいた。

(5) 生命、闘争、スポーツの無意識的行動：ウルリッヒ（『特性のない男』の主人公）は、反省的精神と自然的感情の間で極度に緊張する。それ故に彼の行動の直接性は危機に立ち、意識と生命力の間の緊張は死活問題となる。彼のスポーツへの全考察は、感情と悟性、直観と科学、意識と無意識の葛藤（あるいは分裂）で回転する。

(6) *Entrückung*（有頂点）と *Entlastung*（解除、デ・ポルト）としてのスポーツの体験：思想の半ば真面目な遊戯の中でウルリッヒはスポーツの根本的な体験を、神秘的行為の非合理性と結びつける。アムビヴァレントがその最も鋭い刻印をつけるのは、スポーツの「精神」に関するムシルの思想においてである。

(7) スポーツの真剣さとザッハリヒカイト：ムシルは、スポーツの発生について、遊戯的で素朴なものから厳格で反省的なものへと至る構造転換

について洞察している。

(8) スポーツのアムビヴァレントな評価：スポーツは瀕死の本能の猛威〔または解放〕として低級〔このカテゴリーに要注意〕で粗野な姿を現わす。だが、ムシルは低級で精神のないものこそスポーツの真に解除する（entlastend）性格だとみたのである。この意味で彼は水泳に関するエッセイで、その仮想の手紙の相手に呼びかける。「あなたはどんな場合でもスポーツに高級を求めてはいけない、常にただ低級を求めなさい」と。より高い知的要求をもつスポーツというものは、（クライストの意味での）精神喪失という根本的特徴を完全に失なうことになるというのである。批判の起因は、厳密さのエトスである。批判が向けられるのは、スポーツのマネージャー、科学・官庁による合理化と制度化、また、人間改良家とジャーナリストの誤まったパトス、受動的な観衆の要求である。

(9) 「厳密さと魂」：〔ムシルのスポーツ解釈を包む精神的の広がりについて論じつつ〕ヨーロッパ精神史の特徴的な動力学を規定するのは、合理的な力と非合理的な力の劇的な格闘である。ムシルが大胆にスポーツの体験において投影する永遠の神秘的欲求は、ロマン的衝動と陶酔によって養われるのである。

#### IV 現代日本の1920年代論

『1920年代の光と影』（『現代思想』臨増）につづいて『光芒の1920年代』（朝日ジャーナル編）が発行された。両者とも主に文化論として1920年代をとりあつかっている。『光芒』は、都市(5)、映画(6)、演劇(3)、音楽(3)、美術(5)、建築(3)、文学(8)、思想(9)、科学(3)、風俗(6)、機械(4)、スポーツ(2)の12ジャンル、57編の論集であり、『光と影』にくらべスポーツの項目の有無だけでなく目配りの広さの点で数段優っている。ただし、人物論的傾向が多いのが不満で、文化論としての20年代の表層と深部の描写は不十分である。

『光芒』の渡辺一民（仏文学）解説「1920年代について」をみておきたい。なによりもまず第一

次大戦終結との関連において20年代の本質的性格が把握される。それは、第一に、民衆の解放感と国家への不信感、第二に、西欧文明への懐疑だという。そして、日本の20年代を、「同時代の西欧の文化や政治を受容し、曲りなりにもそれを定着せしめうるだけの土壌が作りだされていた」時期として理解する。「今日の日本人の生活の原型は、ほぼこの1920年代につくりだされたもの」。ヨーロッパ人にとっての大戦体験に匹敵する、あるいはそれと同質である日本人にとっての震災体験が重視され、「1920年代になってはじめて日本は、国際的な時代区分のなかにおいて見ることのできる、そのような国際性をもつにいたった」という共時性が強調され、かつ「日本の現代はまさしくこのような1920年代にはじまった」という現代起点説で結ばれている。

#### V おわりに

・現代日本の状況は「宗教なきスポーツ宗教」と言ってよい。ドラマ的性格、儀式的性格など、内面に関らせてスポーツを考察することは不可欠である。"以上は、未整理でお粗末な報告に対する伊藤高弘氏の意見の一部である。その他の意見は一部本稿に組み込んだ。